

<b>奈良市</b>  <b>手をつなぐ親の会だより</b>	NO 385	令和3年11月18日(木)	
	発行	奈良市手をつなぐ親の会	
	会長	小西 英玄	
	所在地	〒631-0801 奈良市左京5-3-1 奈良市総合福祉センター内	
	Tel 0742-71-0770	<a href="http://naraoyanokai.info/">http://naraoyanokai.info/</a>	

2021年度の理事会を開催する事ができました。



#### ▼奈良市、コロナ発症 0 の報道。

先月までコロナ旋風が吹き荒れていましたが、選挙が終わればコロナも一休み。

開票が終われば、3人の候補が全員当選。奈良市から国会議員3名が選ばれたことは奈良市の財産として活用。しかし改めて、選挙の意味を感じました。県会議員の補欠選挙も2名。親の会をご存知の方が選ばれました。何か、追い風が吹き始めた感じがします。

#### ▼NHKの朝ドラ「おかえりモネ」が終わりました。

コロナで在宅時間が長くなり今まで無縁の朝ドラにハマっています。視聴率が20%程度ですので観られていない方にはチンプンカンプンの世界と思いますが、脚本・安達奈緒子氏の「震災」を描く「非当事者がいかに震災後の東北に向き合えるか」が、このドラマが問いかけたテーマそのものだったのではないのでしょうか。

当事者と非当事者（被害者と非被害者 地元と非地元）

「世の中に必要でないひとはいない」「そこにいてくれるだけでいいじゃない」

「お前になにがわかる、そう思ってきたよ、ずっと。俺以外の全員に」「震災では色んな人が、色んな経験をして、色んな考えをもちました。でも、本人とは違うので、完全にわかったりすることは無理だし、共感することはおこがましいことだし、傲慢（ごうまん）なことだし、安易に『気持ちはわかるよ』とは言えないとの共通認識は、僕らの中でありました」

「東北の人間ではない人間が、東北に思いをはせる中で、『人の痛みはわからないけど、わかりたい』という気持ちを持ってやってきました」「あなたの痛み僕にはわかりません」「でも、わかりたいと思っています」

「おかえり」とは、相手を受け入れることだと気づかせてくれた朝ドラでした。

#### ▼障害者ホーム、新タイプ検討 1人暮らし希望者向け

障害者がアパートのような建物で支援を受けながら共同生活するグループホーム（GH）について、厚生労働省は11月5日、1人暮らしや恋人との同居を望む人向けに、新たなタイプを設ける方針を明らかにした。2024年度にも導入したい考えだが、同日開かれた審議会の部会では、利用期限を設ける案などに委員から懸念が上がり、引き続き検討していくことになった。

厚労省の案では、障害者がGHへの入居を希望した段階で将来的に1人暮らしなどを望むか、従来型のGHへの継続的な入居を希望するか意向を確認する。

新たなGHでは金銭管理や家事など、自立生活に必要な訓練を実施。退去後も支援する。

### ▼映画「梅切らぬバカ」のストーリー

\* 11月12日に全国ロードショー公開された映画「梅切らぬバカ」。自閉スペクトラム症の50歳の男性とシングルマザーの母子2人の日常を描いた作品。親子の愛情や絆といったテーマに加えて、障害のある人が地域の中で暮らすということについても考えさせられる映画です。

\* 閑静な住宅地、大きな梅の木がある古い一軒家に暮らす、山田珠子（加賀まりこ）と50歳の息子、山田忠男こと忠（ちゅう）さん（塚地武雅）。珠子は占い師として生計を立てるシングルマザー、忠さんは自閉スペクトラム症、几帳面で馬が好き。毎日決まった時刻に起き、朝食をとり、作業所に通う忠さんと母の穏やかな暮らしに、変化が訪れる。隣家に越してきた里村家は、思い付きで行動しがちな父・茂（渡辺いっけい）、明るい母・英子（森口瑤子）、小学生の草太（斎藤汰鷹）の3人家族。あるとき、忠さんがぎっくり腰になったことを機に「親なきあと」を考えた珠子は、忠さんをグループホームに入居させることを考え始める。ところが、そのグループホームには、近隣からの反対運動が起こっていた——。タイトルは「桜伐る馬鹿梅伐らぬ馬鹿」ということわざから。木によって剪定のしかたが違いうように、それぞれの人の特性によって向き合い方があるという意味。

\* 本作は、和島香太郎監督（私の娘は重度の障害がありますが、保育園時代の友だちは、娘のことを友だちとして自然に受け入れていました）が脚本も手がけ、地域コミュニティとの不和や偏見といった問題を取り入れながら、母親・珠子（加賀）と自閉症を抱える息子・忠男（塚地）が社会の中で生きていく姿、何気ない日常、その揺るぎない親子の絆をあたたく丁寧に描いた作品。

\* 劇中で自閉症の息子を温かく支える母親を柔らかく演じた加賀だが、プライベートでも18年間連れ添うパートナーの息子が自閉症を抱えている。印象的なシーンを問われると「なるべく日常的に、芝居じゃなくて、ただそこにいることが1番、大事と思っていたんですけど、自然にこみ上げてしまうことがいっぱいあった。すると監督が嫌がるんです（笑）。『涙りません』と」と裏話を明かす。「私の中で1番、大事だった『産まれてくれてありがとう』と伝える（シーン）。伝えてもわからないんですけど、でも言いたかった。そのシーンを撮っている時は、どうもこみ上げてきちゃう。ものすごく自分の気持ちを落ち着かせた。今でも撮り直せるなら撮り直したいぐらい気になります」と語った。

「ありがとう」のせりふは加賀の思いから台本に入ったという。和島監督は「『ありがとう』というストレートなせりふが書けなかった。この映画で忠さんは、いろんな人から疎まれたりする存在でもある。胸が締め付けられる場面も多い。『ありがとう』の言葉が、どれだけの救いになるのか。とても大切な言葉だなと思うのと同時に、その言葉ですら忠さんに届いているか分からない。珠子の切なさとかも含めて表現するのは重要だと思いました」と話す。加賀は「あってよかったですね。頑固な監督が、その場面を納得してくださったのは台本をいただいてから、だいぶ経ってからでしたけど。そういうお子さんを持っているお母さんと会って、その方に取材したら私と同じことを言ったんですね。私が言うと自己満足で言っていると聞こえるんじゃないかと心配だったのよね。それも分かるけど、あってよかった」と振り返っていた。

\* 最後のあいさつで加賀は「この映画を見た方が、ときどき街中で自閉症の方に出会った時に手を差し伸べてくださらなくてもいいので、ほほえんでくれたらいいなって。もう、それだけを願っております」とメッセージを送っています。

\* 新たに施設をつくるときの反対運動で、反対派の人たちは「子どもたちの安全を守らなくてはならない」と主張します。そのときに、じゃあ当の子どもはどう思っているのか、ということは見えてこない

んですね。もちろん、大人たちは本気で、子どもを守るという切実な思いをもっているでしょう。でも、子どもたちからすると、自分たちの存在が差別行動といわれてもおかしくないことの口実に使われている、と感じることもあるんじゃないかと思うときがあります。

\* 私の娘は重度の障害がありますが、保育園時代の友だちは、娘のことを友だちとして自然に受け入れていました。ですが周りの大人から「あの子と一緒にいると危ない」と言われていたら、「あの子は危ない子だ」とインプットされてしまうかもしれませんね。

\* 愛される存在、ほんとにそうですね。私が自宅でオンライン試写を見ていた時に、隣にいた（障害のある）娘が興味津々で忠さんのことを見ていましたよ。娘が通っている特別支援学校には自閉症のあるお友達もいるので、「あれ、友だちかな？」と思っていたのかもしれませんが。いつもはドラマなんかには興味がないようで全然みないんですが、この映画は集中してよくみていましたね。

\* 取材をしていた中で、ダウン症のあるお子さんを育てるお母さんの話を聞いたときがあったんですね。その方は、「息子にはこの町の有名人になりなさい、と言いつけて育てた」とおっしゃっていました。それは、この町の中で生きていくために、この町の人たちに存在を認められて愛される人になりなさいということ。私も自分の子どもには、地域の中で生きてほしいと願っています。親子や、先生と子どもという縦の関係、あるいは子ども達同士という横の関係だけでなく、地域の中に、さまざまな立場の人との「斜めの関係」が欲しいと思っています。そうした思いにも通じる映画だなと感じました。

### ▼久しぶりの「親の会だより」

今回は色んな記事を集めて編集しました。「おかえりモネ」「梅切らぬバカ」で当事者の気持ちを表現しました。当事者の気持ちを理解しない厚生労働省もお伝えしました。